

命の大切さを伝える「命育」における表現方法の考察

—適応表現を調整可能とする命育ツール「命ちゃん」の制作—

情報メディア学科 大島 直樹ゼミ

1023018

二瓶 幸

1 はじめに

小学3～6年生は「死」という概念を理解し始める年齢[1]とされている，なので命の大切さを学ばせることは，小学校教育の一環として行われているが，多人数を対象にした授業内容に対し拒絶感を持つ子どももいる。そこで，個々人に即した適応表現を調整可能とする方法の提案によって，この年齢で適切に命の大切さを学ばせることが必要だと考えた。

本研究の目的は，命を尊重する気持ちを育てる「命育」を行うために年齢や個人の嗜好に即した生命観の表現方法を明確にすることである。そして見出した方法を使い，適応表現を調整可能とする命育ツールの提案を行う。

2 命育(めいいく)とは

道徳教育の内容の中には，自分や自分以外の命の大切さを学ぶ内容が含まれている。その内容を総じて「命育」と呼ぶこととした。

また，命の大切さを伝達するという概念を命育，その考え方を実行するための媒体を命育ツールとした。その上で，本研究の命育ツールの表現方法はデフォルト表現からリアル表現へ変化する情報をユーザ自身が個人的判断で調整させることで，対象者に適したリアルさの表現が提示可能となる。この方法によりリアルさへの嫌悪感から生じる拒絶感を排除できると考えた。この体験を反復させるこ

とで許容できる命の範囲を広げ，他の生き物の存在を認めさせる。

3 制作物

本研究で提案する制作物は，命を感じさせる要素を組み合わせた装置によって，「生」を感じさせる。命を感じる要素を徐々に追加していくことで，よりリアルな「生」を感じることに繋げる。この「生」を表現する装置「命ちゃん」及び，より具体的な命の対象を牛に展開した装置「ぎゅーぎゅー」を制作する。

3.1 命を感じさせる要素

命を感じさせるため，大学生17人に対して「命を感じさせる要素」についてのアンケートを実施した。「命を感じさせる要素」について，9項目の質問に対し，複数選択可能形式で質問した。結果は「呼吸」，「心音」，「体温」の3項目に多くの回答があった(表1)。

表1「命を感じさせる要素」アンケート結果

心音	11人
鼓動の振動	5人
呼吸	12人
血管の動き	4人
なき声	5人
体温	10人
鼻息	2人
動作	6人
その他(血液が赤いこと)	1人

3.2 感覚の組み合わせ

人間は一つひとつの要素に命を感じているのではなく、複数の要素を感じることで命というものを感じていると考え、その組み合わせについてアンケート調査を実施した。

表2はその結果であり、「写真+音+温度+振動」は最も多い15人であった(表2)。

表2 「感覚の組み合わせ」アンケート結果

写真 + 音 + 温度 + 振動	15人
画面暗転 + 音 + 温度 + 振動	0人
イラスト + 音 + 温度 + 振動	1人
写真 + 温度 + 振動	5人
写真 + 音 + 振動	4人
写真 + 音 + 温度	0人
どれも変わらない	0人

3.3 命育ツール「命ちゃん」の概要

「生きている」と感じさせるため、ユーザの4つの感覚を4装置で刺激する。

- ① 動画によって視覚を刺激し、動作を感じさせる。
- ② ペルチェ素子によって温覚を刺激し、体温の暖かさを感じさせる。
- ③ スピーカーによって聴覚を刺激し、心音やなき声を感じさせる。
- ④ 振動スピーカーによって圧覚を刺激し、鼓動の振動を感じさせる。

命ちゃんの構造は以下の通りである(図1)。



図1 「命ちゃん」の構造

3.4 命育ツール「ぎゅーぎゅー」

ぎゅーぎゅーは「命ちゃん」を内蔵させる。牛形部分は半レリーフ状、大きさは横幅173

cm×縦幅133cm、牛の実寸大である(図2)。



図2 「ぎゅーぎゅー」プロトタイプ

4 検証方法

制作した命育ツールを用いて、4歳から12歳の子ども11人にアンケートを行った。その結果、命を感じたと回答したのは8人、命への意識が高まったが7人だった。以上のことから、命を表現できたことは明らかであり、命への意識が向上したという回答が多かったため、命の大切さを伝える教育方法として有用であることが明らかにできた。

5 まとめ

「命育」における表現方法について調査、考察を行った。その結果、人工的な要素の組み合わせであっても、命を伝えることが可能なことが明らかにできた。組み合わせは多感覚を刺激することが最も効果的である。

以上の知見をもとに制作した適応表現を調整可能とする命育ツール「命ちゃん」と「ぎゅーぎゅー」は、子ども達に命の大切さを伝える教育の有効的な教育方法として活用できる。

参考文献

- [1] 赤澤正人, 子どもの死の概念について http://ir.library.osaka_u.ac.jp/dspace/bits/tream/11094/7513/1/6_17.pdf, 参照 Aug.13, 2013.
- [2] 佐藤幸司, 道徳授業は自分でつくる 35の道しるべ, 日本標準出版, 東京, 2008.